

## ブロイラーに見られたマレック病の一症例

中央食肉衛生検査所	鵜飼 あや 小野塚 珠子
千葉県衛生研究所	丸 ひろみ
八日市場地域保健センター	小野 健司
南部家畜保健衛生所	片山 雅一
東総食肉衛生検査所	川合 ちず子

### 1 はじめに

管内の食鳥処理場において、平成14年以降、毎年夏から秋にかけて脾臓の腫大のみを呈する症例が多発している。今回、皮膚の白色結節と脾臓・肝臓が白色結節を伴って腫大する症例に遭遇したため、マレック病 (Marek's disease 以下 MD) を疑い病理組織学的検査を実施した。

### 2 材料および方法

品種；チャンキー（鶏） 性別；不明 日齢；53日齢

発生状況；平成18年9月19日に搬入された4,032羽のうちの1羽

検査部位；皮膚、筋肉、肝臓、脾臓およびファブリキウス嚢の各臓器

病理組織学的検査；20%中性緩衝ホルマリンで固定し、パラフィン包埋後薄切してHE染色を実施した。

### 3 結果

#### 【肉眼的所見】

食鳥と体はやや削瘦し、大腿部から腹部の皮膚に5～6mm大の白色結節が認められた。皮下の筋肉においても同様の結節を認めた。肝臓は退色して腫大し、微小な灰白色結節が全体的に認められた。脾臓は著しく腫大し（長径6cm×短径5cm×厚さ3cm）、白色結節が散在していた。

#### 【組織学的所見】

皮膚；真皮から皮下織にかけ、クロマチンが豊富な核を持つ小型リンパ球様細胞が胞巣状から浸潤性に増殖していた。クロマチンが疎で、淡明な核をもつ大型リンパ球様細胞も認められた。

筋肉；クロマチンが豊富な核を持つ小型リンパ球様細胞や淡明な核をもつ中～大型のリンパ球様細胞が血管周囲に浸潤性に増殖していた。一部に壊死も認められた。

肝臓；グリソン鞘周囲にクロマチンが豊富な小型リンパ球様細胞が認められた。核の異型性が強く、核分裂像も散見された。小型リンパ球様細胞は類洞内にも浸潤し、肝細胞を圧迫していた。偽好酸球も認められた。

脾臓；本来の構造は失われ、小～大型の比較的細胞質の豊富なリンパ球様細胞が混在し、核分裂、スターリースカイ像が散見された。核の濃縮・崩壊が頻見され、マクロファージの増数が認められた。

ファブリキウス嚢；

濾胞間組織を中心に小～中型のリンパ球様細胞がびまん性に増殖していた。濾胞構造が崩壊し、濾胞間組織との境界不明瞭な部位も認められた。残存する濾胞ではリンパ球の減少とスターリースカイ像が散見された。嚢上皮の陥入、嚢胞形成も認められた。

## 【診断名】マレック病

### 4 考察

MD と類症鑑別が必要な疾病に鶏白血病（LL）および細網内皮症（RE）がある。MDは小型～大型のリンパ球様細胞が混在する境界不明瞭な腫瘍を形成するのに対し、LLは均一で大型なリンパ芽球様細胞により境界明瞭な腫瘍を形成する。一方、REは大型核小体をもつ特徴的な細網内皮細胞で腫瘍を形成する。また、MDは1～2ヶ月齢から発生が認められるのに対し、LLは16週齢以前での発生は認められていない。本症例は、腫瘍病巣が小型～大型の様々な大きさのリンパ球様細胞で構成され浸潤性に増殖していること、その発症日齢からマレック病と診断した。さらに、ファブリキウス嚢において、リンパ濾胞の破壊とマクロファージの反応が著しく認められ、伝染性ファブリキウス嚢病（IBD）等の感染症の関与が疑われた。

MD ウイルスはほぼすべての鶏が感染し、ワクチンによって発症を抑えている疾病である。しかし、IBDのような免疫低下を起こす疾病の感染や、ストレス、飼育環境の悪化により発生率が高くなる。今回発生は一羽であったが、単に食鳥検査だけで完結させるのではなく、家畜保健衛生所との連携を取り、鶏舎の消毒等、養鶏場の衛生管理の向上をはかり、疾病による廃棄率の低下を目指していきたい。

MDにかかわらず、食鳥検査は肉眼所見による診断が主体だが、確定診断には精密検査が必要となってくる。しかし現状の問題として検査に時間がかかる事が挙げられ、結果によってはその後の対応が遅れることも考えられるので、今後は検査の迅速化を図っていくことが課題である。